

2016年8月6日～7日 SSW夏の集い第5回大会IN大阪 報告 山崎たい子
主催 SSW-NET・大阪社会福祉士会

1、基調講演

子どもの貧困問題と学校教育について考える 松本伊智朗北大大学院

①貧困問題を考えるときの大事な視点は、社会保障制度があるにもかかわらず、何故、貧困という問題がおきるのか？制度はうまくいっているのか？どんな制度・どんな社会があるといいのか？ 憲法25条があるにもかかわらず、もれている人が生まれる。

貧しい人とはどんな人？劣っている人？他と違う人？と、ホントの貧困探してみたいなことを初めても意味がない。どんな社会をつかっていきたいのか？子どもの笑顔が絶えない社会をつかっていけるか、これがとても大事である。

②家族についての認識、近代の家族はとてももろいものである。

家族制度は、財産を継承されていくしくみ。兄弟は平等ではない。家族の中で、財産を不平等に分配することで、富を安定化させる。封建制度は土地に頼り、移動を防ぐ。資本主義は移動を促進する。今の家族はもろい。生まれても、移動して、壊れて、なくなっていく。親や家族に対する厳しい評価、責任を問うまなざしがあるが、家族に頼っていては難しい。

家族に対する依存度をどう低くしていくか。子どもが育つのに、たくさんの大人がかかわってつくっていくことが必要。

貧困とは、人間が生きていくために必要なものを、欠いている状態。満たすための手段がない。例えば、修学旅行に行けない。食べられないという事ではないが、子どもの社会参加、学校生活、友達との関係、体験が狭められる。相対的貧困。人間らしく、人間としてのくらしができる。誇りが傷つけられない。

2、シンポジウム「学校から夕刻を支える場へ」

ニードの高い家族に、在宅支援、地域で支援できるリソースをどうつくるか？支援拠点の整備や専門職の配置も含め。学校が地域とつながっていく、社会に開かれた学校、教育。1人の子どもから、点を線や面にしていく。社会福祉事務所やNPO法人、社団法人のSSW3名が、それぞれの実践について交流。

●SSWがかかわり、要保護対策協議会(要対協)で名前もあがり、地域のネットワークでみていきましょう、情報共有、見守り支援の対象になっても、直接、何かできるか、というのは、夜の子育てサポート、地域の力で夜の居場所をつくろうと商店街の空き店舗を使い、活動した例。

●NPO法人立ち上げ、個別のケースに対応して、週1回でも親子支援をはじめようと、主任児童委員の中に、お寺住職おり、そこを拠点にしての取り組み。

●社団法人たちあげ、家をゼロ百相談支援センターとして、実践にふみだす。学校との連携を民間がすすめるのは、とても大変。学校関係者を通じてつながるなど、信頼を築いた例。

3、分科会 地域力を生かした学校づくりをめざす

一子どもの育ちにかかわる専門職との連携一

<学習支援の居場所づくり> 大阪のM小学校校長先生の報告

在籍児童の約4割が、外国にルーツのある子ども達。約15カ国。フィリピン、台湾、中国、韓国、モンゴル、ガーナ、アメリカなど。生活面(学校休みがち、兄弟の面倒見ている。病気になっても病院いけない。歯が痛くても病院に行けない)、学力面(2~3ヶ月でコミュニケーションとれるようになるが、学力は難しい。テストで点数はとれないで様々な困難を抱えている。小学高学年でも、「私、高校行かれへん。お金ないし、頭悪いし、、、。」とあきらめている。学校では、異文化理解をすすめる教育などもすすめ、本人達が生き生き、活躍できる取り組みも行っている。

学校だけでは、できない支援を外に求め、より子ども達の可能性が広がるように。

<子ども教室> 在日3世、コリアンセンター事務局長の報告

差別、貧困から逃れる、「どうぜ俺なんか、やっても無駄や」と思って生活してきた。努力して、報われるという感覚なかったが、民族学級などで学ぶ中で、ようやく自己肯定感を持つことができるようになった。在日コリアンの支えになりたいと、現場のたたきあげでソーシャルワークで活動してきた。子ども達を支援しようとするれば、親の援助をしなければならなくなる。保証人や身元引受人にもなることある。

学力不振、貧困、暴力、、、。学校の教育現場で、親や子どもの責任にしないという見方、視点、とても重要。

生活の現状は、就労の選択がそもそも外国人にはない。夜の仕事に就く人が多い。昼のレジうちの半分の時間で、夜の仕事の収入得られる。接客で稼げなくなったら、派遣会社へ。いずれも、必ずブローカーがいる。搾取のメカニズムがある。

子どもの現実から出発する。厳しい現実に向き合わなければ、子どもの人権守れない。子ども教室は、週1回、実行委員会形式で、NGOセンター、学校、子ども広場、国際交流センターなどが連携して対応。子ども一人に、ボランティア1人。ボランティアを支援するコーディネーターを5人おいて、調整している。

<母子生活支援施設> 入所型の児童福祉施設を拠点にした通所児学習支援、子ども食堂などの報告

母子生活支援施設を退所後のアフターケアから広がる。民生委員、児童委員と一緒に、学習塾を開催。地域を基盤にして、子ども家庭福祉、支える場が、支える人を育てる。教育と福祉の連携。縁パワーメンと会議